



題字 藤本利夫書

〈1988年7月9日創刊〉
 発行2020年3月1日 〈毎月1日発行〉
滋賀県民主教育研究所
 〒520-0052大津市朝日が丘1丁目
 11-3 教育文化会館2F
 TEL & FAX 077-525-5364
 教育110番 077-523-3715
 eメールshiga.minken@gmail.com
 HP: http://shiga-minken.jimdo.com/
 振替口座番号(会費振込にご利用ください)
 ①ゆうちょ銀行/記号番号01070-5-40576
 ②滋賀銀行本店営業部/普通口座511256
 加入者(口座)名 滋賀県民主教育研究所

入院患者の独り言

元京都橘大学教員 生源寺 孝浩

筆者には左側にそけいヘルニア（いわゆる脱腸）の持病があつて、先日、手術をした。入院した総合病院の若い外科医からは「何も問題がなければ手術の翌日には帰れます」と聞いていたのだが、その後、合併症が起きたのである。おなかの皮を電気メスで切つてヘルニアの措置をしたが、毛細血管が閉じていなかったのか、傷口の下に血のこぶ（血腫）が出来て腫れ上がり、その上、血腫から漏れ出した血液が、おなかの皮の下で赤い痣（あざ）のようになったのである。おへその下6センチのところから、おなかの左下の方、それに加えて、左へ背中の方へ回っているし、左太ももも下へ10センチ×左へ20センチくらいの赤い血の痣が出来た。看護師さんは毎朝、私のその血の痣の大きさがどの程度増えているか、油性ペンで点線をつけていた。最大で直径30センチにもなっていた。いまは青あざになっていて少しずつ薄れてきている。手術の

傷口は左そけい部のすぐ上にあり、その皮下に血のかたまりが出来たのだから、その血のかたまりは陰囊にも下りていつて、さも、「信楽の狸」のようになつてしまつていた。毎日、朝と夜、担当看護師が血圧、体温等の測定と、痣の大きさを確認しに来ていたが、大抵の看護師は「ちよつと見せてくださいね」、「見てもいいですか」、こう言つて患者の無言の「うん」を引き出して患部の観察をしていた。だが、ある夜、担当看護師についてきた別の看護師は、ひと言も断らずに筆者のパンツを20センチ以上グツと下げて、痣と「信楽の狸」を見て「すごいねー」と言ったのだ。そのとき、筆者は「ぼくの『信楽の狸』を見るには、整理券が必要です」と心の中で叫んでいた。その夜、なかなか寝付かれなかつた。

《 今月の紙面 》

- ・入院患者の独り言 / 生源寺 孝浩 …P1
- ・学校がたいへんだ / 松田 洋介 …P2, 3
- ・授業のなかの子ども理解を目指して / 北川 智明 …P4, 5
- ・地域に根差し地域と共に歩む学校を目指して / 森田 和行 …P6, 7
- ・学校はやっぱりおもしろいところ / 本田 清春 …P8

《 2020年3月号 No. 381 》

「整理券」を持つていないはずだ。看護師という職業なら患者に何をしてもよいということはない。命に関わるとき以外は。患者にも人権がある。断らずに他者のパンツを20センチ下げる権利は誰にもない。

私たち教師は子どもたちとの間で、「整理券」を受け取つていられるでしょうか。「整理券」を発行できるのは、あくまでも子どもたちです。教師という職業に立つ者は、子どもを教育するといふ大義を持つがゆえに、子どもの諸権利を見失う可能性を抱えています。教えてもらいたい人と教えたい人との無償の契約が常に成り立っている関係を、学校の中で作つていけるよう求めたいものです。

(しろうげんじたかひろ)